

# ヘボンの「日本語学習者の視点」 — 『和英語林集成』と『日本国語大辞典』の比較から

今村 志紀 (国立国語研究所)

## 1. はじめに

『和英語林集成』は、ヘボン (James Curtis Hepburn, 1815-1911) による、日本初の和英辞書である。本発表では、その『和英語林集成』に見出し語として取り上げられた語について、日本最大の国語辞典である『日本国語大辞典』との照合調査 (進行中) から見えてきている特徴を、実例をもとに報告する。

なお、本発表は、人間文化研究機構広領域連携型基幹研究プロジェクト「異分野融合による総合書物学の拡張的研究」による成果の一部である。

## 2. 対象資料と調査方法について

『和英語林集成』は、前述のとおりヘボンによる和英辞書である。初版の刊行は1867年であり、以降1910年の第九版まで版を重ねる。初版・再版は国外 (初版は上海版とロンドン版、再版は上海) で印刷されたが、第三版からは丸善商社書店となる。

なお、飛田 (2007) において、ヘボンが第三版出版後に版權を丸善商社書店に譲渡したため、本文の訂正増補については、第三版までが主となる旨が指摘されている。今回の調査では、その第三版 (国立国語研究所蔵書目録データベース <https://dglb01.ninjal.ac.jp/ninjaldb/bunken.php?title=waegorin3>) を使用する。なお、第三版の見出し語の数は、35,000あまりである。

『日本国語大辞典』については、日本最大の国語辞書であり、項目数が50万、全14巻からなる。また、現代の国語辞典ではあるが、意味の変遷や歴史、時代ごとの用例なども掲載されており、『和英語林集成』出版当時の意味と対照することが可能である。この『日本国語大辞典』については、2025年現在での最新版は第二版であるため、第二版のweb版を用いる。

調査方法としては、基本的には『和英語林集成』第三版の見出し語35,000あまりについて、『日本国語大辞典』に立項されているか、されていれば意味・品詞・表記は同じかなどを、一語一語確認していく方法をとる。

なお、本発表で用いる結果は、2025年11月時点での調査結果である。

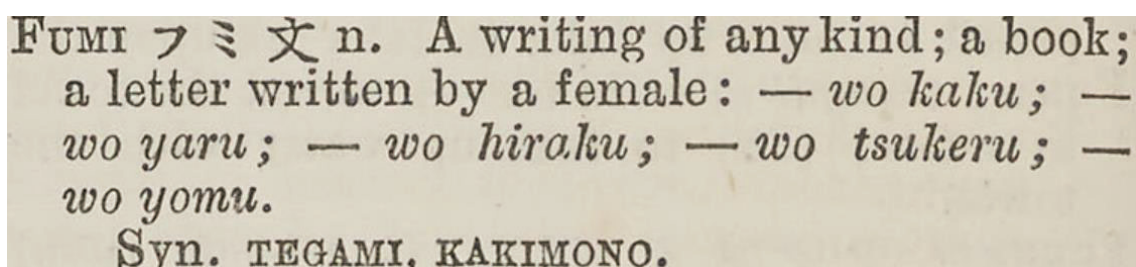
### 3. 見出し語の並べ方と表記

まず、『和英語林集成』と『日本国語大辞典』の二つの書籍を見比べたとき、明らかな違いがある。見出し語の並べ方と、その表記である。

『和英語林集成』は見出し語がまず（日本語に対応する）ローマ字で書かれ、アルファベット順に並んでいるのである。これは、調べたい語の音さえわかれば、五十音を知らなくても、調べることができる、ということの意味する。

対して『日本国語大辞典』をひく場合は、第一段階として、「調べたい語の最初の文字が、五十音の中でどこに位置するか」を知っている必要がある。五十音というシステムは、国語辞典をひくためには一般的であるが、第二言語（以上）の学習者にとっては、知らなくても日本語でのコミュニケーションに支障はないシステムである。既知のシステム（この場合はアルファベット順）の中から探せたほうが、はるかに障壁は低い。加えて、見出し語がローマ字で書かれているということも、「音さえわかれば」漢字やかなの表記を知らなくても、情報にたどりつくことを可能にしておき、こういった作り方ひとつにも、学習者としての視点が生かされている。

参考までに、『和英語林集成』の見出し語について、実例として「文（ふみ）」の箇所を下に示す（第三版 94 ページ）。



FUMI フミ 文 n. A writing of any kind; a book; a letter written by a female: — *wo kaku*; — *wo yaru*; — *wo hiraku*; — *wo tsukeru*; — *wo yomu*.  
Syn. TEGAMI, KAKIMONO.

### 4. 「〇〇な」「〇〇に」「〇〇と」をともなう見出し語

ここからは、内容に関する特徴を挙げる。

『和英語林集成』の見出し語には、「な」「に」「と」（形容動詞や助詞）をともなう語が多く含まれている。「な」をともなうのが 31 語、「に」は 109 語、「と」は 31 語である。

参考までに、それぞれの見出し語から抜粋した例を（読みやすさのために、ヘボンの見出しのカタカナをひらがなに変換した状態で）いくつかあげておく。

な：

あこぎな あたたかな あはれな

いきな いやな

こまかな こしやくな

くちがるな くちぎれいな

まつかな

なだらかな なよらかな

おほきな

をつな

さやかな

すいな

たしかな

つうな

うつりぎな

に：

あべこべに あひむかひに あからさまに あきらかに あこぎに あらたに

べつべつに

ちなみに

ひとおもひに ひとすぢに

ほのかに

こころまかせに こまかに ことこまやかに

くちぐちに

まぶかに まことしやかに まれに

めつたに

みだりに

ものうげに

むだに むりにむしやうに

ないがしろに

にはかに

のちに

おもけに おもふままに おもむろに

さだかに さやかに

しどろもどろに しきりに しづやかに

すぐに すてきに

たがひに たまに

てんでに  
とこしへに ともに  
つぶさに つねに  
よしなに

と：  
ばつたりと ばつと  
ひらひらと ひろびろと ひつそりと ひやりと  
ほろほろと ほろりと  
ひよいと ひやうと  
こまごまと こつぜんと  
むぎむぎと  
によきによきと によこによこと  
しやんと しんしんと  
すつぱりと  
とやかくと  
うまうまと

これらの語を『日本国語大辞典』で調べると、ほとんどのケースで「な」「に」「と」のつかないかたちが見出し語となっている。

日本語が第一言語であれば、これらの例を見ればすぐに「〇〇+な」である、あるいは「〇〇+に」である、などと語の構成がわかり、さらに〇〇部分の辞書形（辞書の見出し語に載っている形）が何であるかは考えなくともわかることがほとんどであるが、学習者ではそれが難しいことも多い。そのような場合でも、『和英語林集成』では、聞いた単語をそのまま調べることが可能である。

なお、さきほど挙げた例の中では、「あこぎな」「あこぎに」と「こまかな」「こまかに」が重複して出現しているが、『日本国語大辞典』ではどちらも「あこぎ」と「こまか」のみが立項されているのに対し、『和英語林集成』ではそれぞれ「な」「に」のつくかたちで立項されている。加えて、『和英語林集成』においては「あこぎな」「こまかな」が *adjective*（形容詞）、「あこぎに」「こまかに」が *adverb*（副詞）と、「な」「に」によって品詞が変わる、という定義をしている。これは、「な」「に」まで含めて一語としてとらえると、文中での役割が異なってくる、という視点を端的に示した例ということができる。

## 5. マス形

次に挙げるのは、動詞についてである。一般的な国語辞典においては、動詞は「聞く」「見る」「行く」などのように、終止形で立項される。『和英語林集成』も原則は同じであるが、一部に「動詞+マス」の形で立項されている語が見受けられる。例としては「あります」「出ます」「くださいます」といった現代でも使用頻度の高い語彙もあれば、古語「天降る（あもる）」にマスをつけたとみられる「あもります」のような例もある。

これらの例はいずれも『日本国語大辞典』では終止形のみ見られ、「マス」をつけたかたちでは立項されていない。

なお、『和英語林集成』では「あります」「出ます」「くださいます」については、それぞれ「マス」のない「ある」「出る」「くださる」も見出し語として立項されており、「あります」「出ます」に関しては、それぞれ「ある」「出る」に「honorific masu」をつけたものである、という趣旨の言及がある。

## 6. 「御」のつく名詞

次に挙げるのは、名詞の前に「御」がつく見出し語である。『和英語林集成』において漢字の「御」ではじまる見出し語は93語ある。「御飯」「御空（みそら）」「御曹司」など、ほとんどはいずれの辞書にも「御」のつくかたちで立項されているが、以下の語については、『和英語林集成』には「御」のつくかたちで見出し語があり、『日本国語大辞典』には、いずれも「御」なしの立項のみであった。

御條目  
御入内  
御勘定奉行  
御堅勝  
御高家衆  
御老中  
御太老

この7語のうち、「御條目」を除く6語は、人、とくに立場が上の人に関する語彙である。例えば、「堅勝」は相手の健康に関して用いる語であることから、実際に使用する際は、「御」をつける場面が多いと推察される。また、「御條目」についても、法律や規則の各項目をあらわす語であることから、権威的な意味合いをもたせるた

めか、『日本国語大辞典』（見出し語は「御」なし）の例文でも、「御」つきの例が複数引用されている。

このような点から、やはりヘボン は学習者として、「実際にどう使われているか」に基づいた立項をしている、ということが出来る。

## 7. 特定の形でしか（ほぼ）使わない語

これについてはまだ調査中ではあるが、使われるかたちがほぼ限定されているといえる語についても言及しておきたい。例えば「あぎなう（禍福はあぎなえる縄の如し）」「心おきなく（おきない等のかたちではほぼ使われない）」などである。

『和英語林集成』ではその出現形（「あぎなえる」「心おきなく」）が見出し語になっているのに対し、『日本国語大辞典』は終止形（「あぎなう」、「心おきない」）を見出し語にしている、という例がいくつかみられる。

会話や書物で遭遇した知らない語を調べる際、出現形のまま辞書に載っているほうが、特に学習者にとっては探しやすい。その点でヘボンは学習者の視点にたち、出現形のままの立項を選んだとも考えられるが、これが全体的な傾向であるかどうかは、引き続き調査していきたい。

## 8. おわりに

ここまで『和英語林集成』と『日本国語大辞典』を比較してきた。まだ途中ではあるが、ここに挙げたポイントから、ヘボンの日本語学習者としての視点が、この『和英語林集成』のさまざまな箇所に生かされていることがわかった。

今後も、調査を継続しながら、ヘボンの考えや視点の表れているポイントを探していきたい。現時点では、複合語や受身形（特にいわゆる「迷惑の受身」）などについて、どのような見出し語を立項したのかを調べていきたいと考えている。

参考文献：

岡部一興（2023）『ヘボン伝－和英辞典・聖書翻訳・西洋医学の父』有隣堂

木村一（2015）『和英語林集成の研究』明治書院

高谷道男（1986）『ヘボン』吉川弘文館

飛田良文、李漢燮編（2000-2001）『和英語林集成：初版・再版・三版対照総索引』  
港の人

飛田良文他編（2007）『日本語学研究辞典』明治書院

村上文昭（2003）『ヘボン物語：明治文化の中のヘボン像』教文館

望月洋子（1987）『ヘボンの生涯と日本語』新潮社